

都の西なる檜木原沓掛の里大枝坂は、山重り樹林茂り常に霧深ふして谷幽なり。子規聞かんとて都の騷客此ほとりにいたり、夏の月の清げなるを詠て歌よみ宴して沈酔する時、何がしの鳥の一ツ声におどろかさされてねむりをさますも、韋応物が詩の心にちかし。